

富士市長 齊藤滋与史

市民のみならず、あけましておめでとございます。今年、財政の硬直化で相当きしい困難な年が思われます。しかし、私は「豊かな田園産都」をめざし、住民福祉に努めます。諸施策を推進してまいります。交通の整備、合併記念事業など積極的に行なっています。

# 100年の歩み

## 明治百年 一年目の素顔

### 東海道を駿府へ下る 徳川家のひとたち

「行きは官軍、帰りは仏、どうせ会津にやかうまい」これは有栖川宮(ありすかのみや)を大総督として、錦旗を先頭にかけて東海道を東に下る官軍をみて、この地方の人々がだれ彼となく口ずさんでいた狂歌でした。こんな狂歌があったということは、この地方の多くの人々は、駿州赤心隊や遠州報国隊のように、無条件で尊皇討幕の路線になびいていったわけではないことを示しています。



若林淳之(あつし)さん

慶応四年九月八日、維新政府はこの日、元号を「明治」と改めました。以来かぞえて百年目が、こゝしにあたるわけです。だから、こゝしは政府をはじめ地方自治体などでは、思い思いの行事をとりおこない、こゝし方百年を記念するともに、新しい日本の門出ともしたいとしています。私たちは、明治百年をただなんとなく、自ら考える余地も、選択する余地もないままに、日本の方向が一方的にある方向に、むかわせられることが、果して国民の幸福に連なり、市民の幸福に連なるものなのでしょうか……

それは、この地方が徳川重代の恩顧の地であるとか、安政開港による貿易の利益をより多くうけていたなどという、功利的立場を削り引いてもなお注目すべき動きでした。

しかし以上のような、この地方の人々の窮乏に對する期待やおもむきが、それがむなしなものであったとわかるためには、二月以上の月日を必要としました。慶應四年七月から八月にかけて、酷暑の中を東海道を吉原宿を通って駿府に急ぐ大名行列に多くの人は気付けず、また、わすかな世帯道具をたずさえた家族連れの人々が、つぎからつぎへその後をつたえませんでした。この大名行列は、いわずと知れた徳川宗家でした。朝敵の汚名こそまぬがれましたが、駿府七十万石に格下げされて、封地駿府に移るところでした。おほかの中には徳川宗家の相続人に定められた、

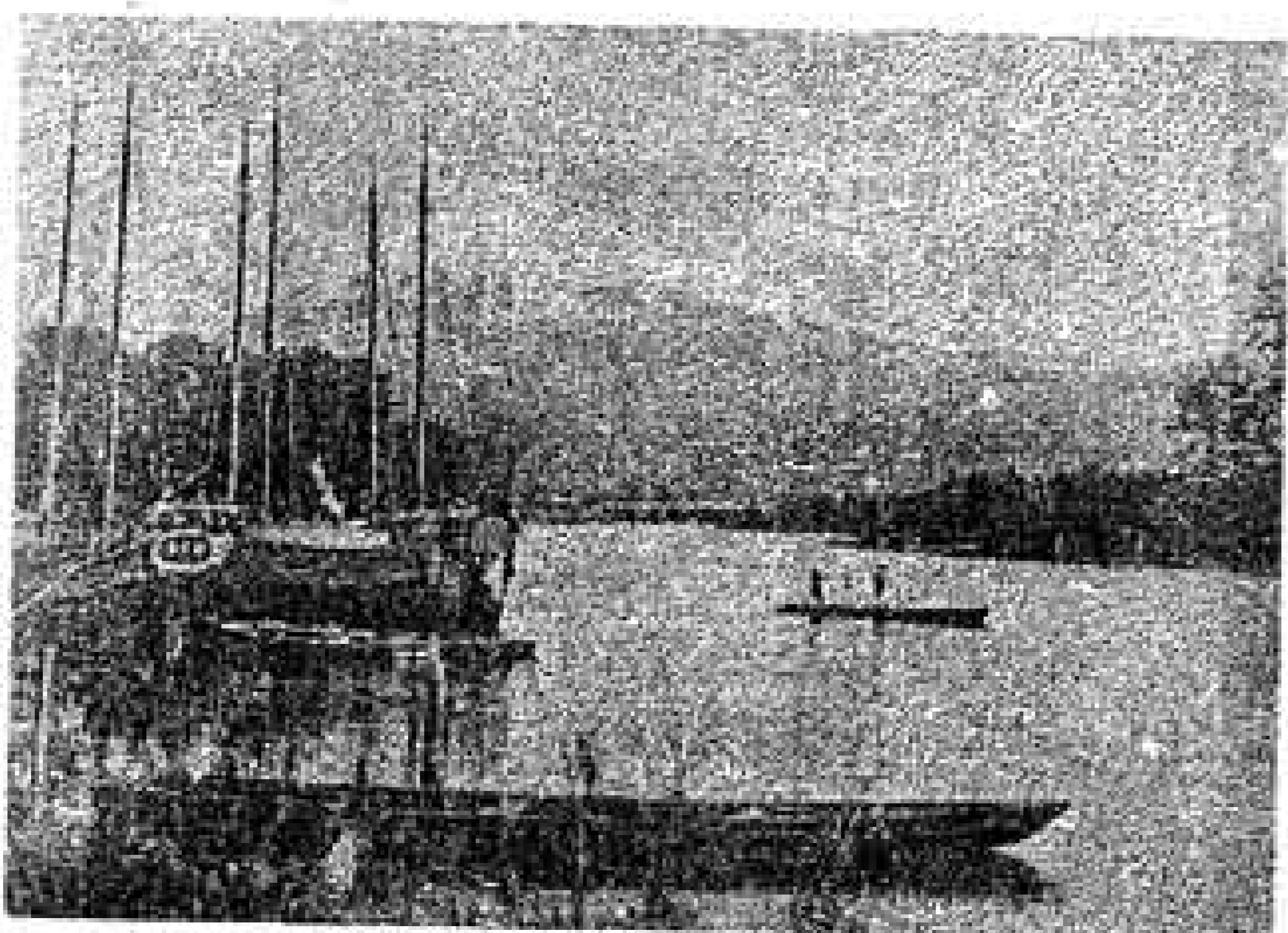
## 静岡藩の遺産 とその継承者

### 野村一郎・内田平四郎らが内山を開墾

幼少の田安龜之助(のちの徳川家達)がおさまっていた。いっぽう、世帯道具をひたして家族ぐるみで駿府をめざしていく人々は、徳川のおとを慕って江戸から駿府に移住を決意した。旧幕臣の無縁移住グループでした。こんなあわただしい動きの中であけたのが、この地方の明治百年の第一年目の素顔でした。

**登場人物**  
●磯部物外 天保六年に生れる。豊原村に住む小学校教師となり、異議を講じて退任。この地方の自由民権運動の指導者。●深井 謙 天保八年江戸に生れ、明治三十八年加島村で七十四歳で没す。平垣村中舎校長をつとめ生涯教育につくした。●生駒藤之 天保十四年江戸に生れ、大正八年七十七歳で没す。万野開拓地の教育につくし、後にボク清舎の校長となる。●野村一郎 天保三年西比奈村に生れ、明治二十年四十八歳で没す。吉原漆口の砂防堤など公共事業につくした。●松永安彦 万延元年平垣村に生れ、昭和六年七十三歳で没す。村長、貴族院議員などをつとめ、この開工場誘致、身延鉄道会社設立につくした。●川口柳作 明治二十年今泉村に生れ、昭和四十二年八十一歳で没す。六業につくし、内山開墾、製茶の奨励につとめた。●内田平四郎 天保十年吉原に生れ、明治四十二年六十七歳で没す。ミツマタの栽培、手すき和紙の改良につくし、入会地の開墾につくした。●柏森貞助 天保十二年依田原新田に生れ、明治四十年六十七歳で没す。地方自治につくし、鉤玄社を創立し竹、ワラのバブルを製造した。●金子彦太郎 明治十六年今泉村に生れ、昭和二十八年八十一歳で没す。衆議院議員、吉原市長などを歴任、地方自治につくし、その開拓山治水、茶業、畜産につくした。●堀野岡太郎 明治七年今泉村に生れ、昭和三十一年九十一歳で没す。手すきの堀岡製紙所を創立し、後に機械すきした。●若林淳一郎 明治十二年比奈村に生れ、昭和三十三年七十一歳で没す。大昭和製紙を創立、我國紙業界の興隆につくし、田子浦工業学校の創立など教育振興にもつくした。●金子彦太郎 明治十六年今泉村に生れ、昭和二十八年八十一歳で没す。衆議院議員、吉原市長などを歴任、地方自治につくし、その開拓山治水、茶業、畜産につくした。

駿府に移った徳川宗家は「府中」は「不忠」に通ずるといった縁起をかつき、静岡と改名し以後静岡藩とよびました。静岡藩は有能な人材がそろっていました。その人材をもって富国強兵を藩是とした領国経営に着手しました。家老大久保一翁を中心に、一時は欧州帰りの洪沢栄一も加わって、くりひろげた殖産興業や教育文化政策には注目すべきいくつかのものがありました。殖産興業では、幕府の体得した国際的経験をいかし、当時外國貿易の輸出品中、生糸につくものは茶であり、この地方が栽培に適していることに着目しました。そして、



大正初期「吉原湊(現在の田子の浦港)」

わがふるさと、百年の歩み。若林淳之先生(四四)「富士宮市業倉九四一」にお願いました。執筆された若林先生は静岡大学教育学部助教授であり、当市の市史編さん委員会の監修者でもあります。



市議会議長 中村新吾

謹んで新春のおよろこびを申し上げます。
社会の変貌にともない、みなさんの行政に対する要望も、日々多様化し、高度化してきています。
私が、交通、公害対策は17万市民のだれもが願うところですが、この2大対策には一丸となって対処し、「防止」に取り組んでまいります。



紙都富士市への道

富士製紙第一工場(鷹岡)や第八工場(現本州紙)が創設

版籍奉還で静岡藩が去ったあと、静岡藩の残した遺産は、殖産興業部門は土地の殖産興業家に、教育文化部門は土着士族の手で継続されて発展していききました。

また影山秀樹は、自村岩本村に村内外の有志とともに勸業社を創立し、甲州谷村の製糸や織布の技術を導入して、農業構造の改善をはかっていきました。また、伝法村の相森貞助は鉤玄社を組織し、竹を原料に製紙事業の開発にあたりました。

つまり、これら一連の人々の動きは、静岡藩の設定した殖産興業路線を定着化するための努力のあらわれと思われ、他方、安政の不平等条約の下における、国際市場のきょう感にさらされた、旧生産構造の体質改善をしなければならぬという、切実な要求を基調とした深刻な努力であったと思われ、なお、国際市場のきょう感といえ、今日の自由化の比でなかつたことにも思われる。

先人の気概と業績

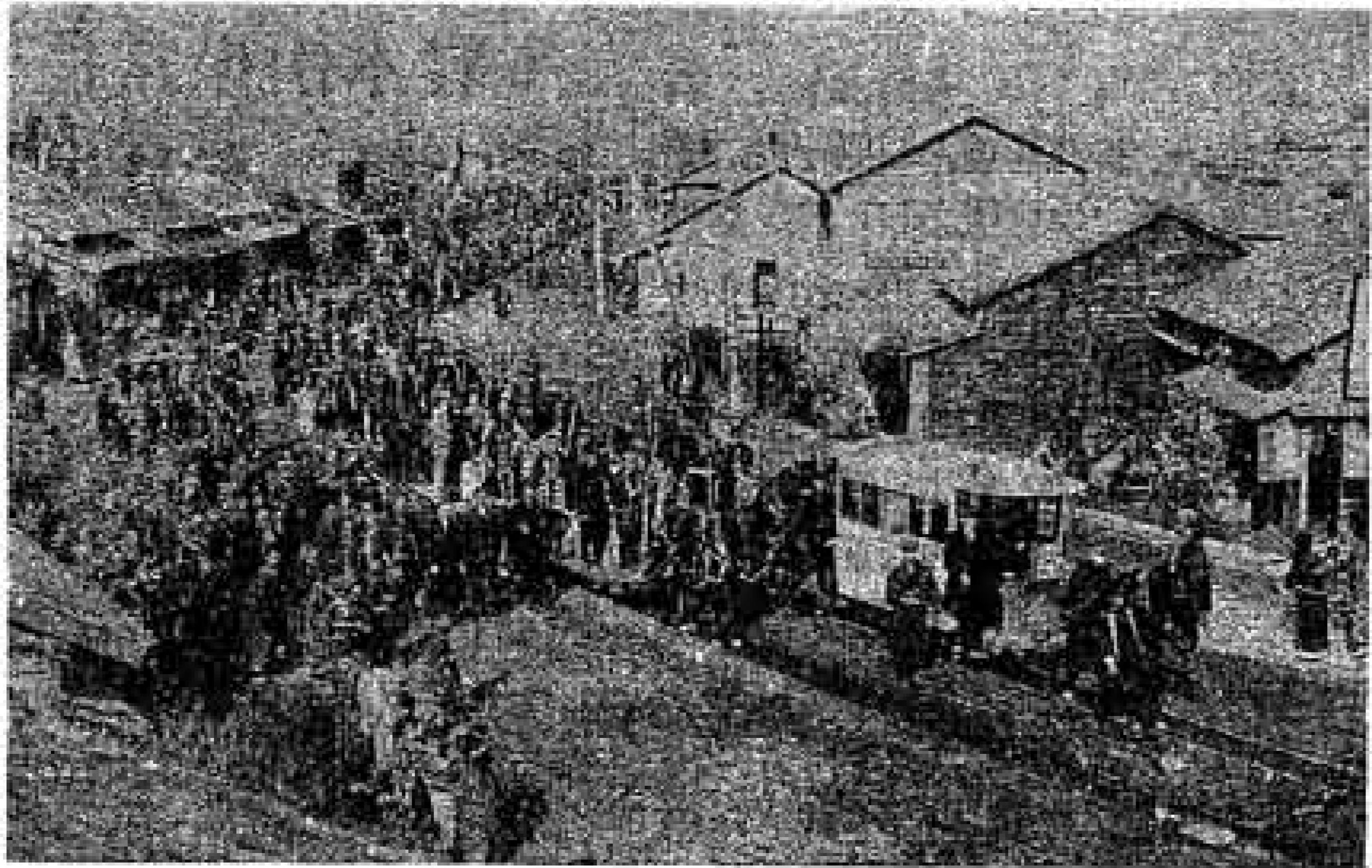
をいたすべきだと思えます。
国際市場のきょう感を、まともにうけていたのは、江戸時代中期以降その生産が軌道に乗り、生産圏と市場を拡大しつつあった、富士地区北部や、庵原郡全域で農民の農閑余業として発達してきた「駿河半紙」の生産でした。
外国紙の輸入により和紙の市場はだんだん狭くなり、深刻なものとなっていました。

富士駅誘致に奔走した松永安彦

こうした背景で活躍するのが旧白糸村の渡辺登三郎です。中央の銀行家などに働きかけ、明治二十一年には富士製紙第一工場を誘致しました。この工場は、豊かな工業用水と、落差の多い潤井川を利用してたちまちその地盤をきつづき、第一、第二工場を設立し、やがて第八工場(現本州製紙富士工場)と発展していったので



松永安彦



鉄道馬車の開通にわきかえるひとたち (現在の富士駅前通り…明治43年ころ)

この間の渡辺登三郎の努力や、第八工場の創立をめぐる加島村の地主松永安彦の犠牲的精神には、主義主張のいかんを問わず、明治の人の気概といえ、このころの富士製紙の発展に大きな貢献をなしたといえます。

掘関製紙が生産競争
六信舎と
大昭和など
地元資本の工場続出
このように吉原の製紙工業の路線は、なお幾多の曲折を経験しつつ、斎藤知一郎に代表される大昭和製紙のような、土地の資本をもととした、富士王子-本州系とは異なった型の中で雑草の如く力強く発展していったので

いつぱう、これらの工場が立ち働く人々は、工場周辺の人でた。しかし、遠く吉原付近から通う人もかなりいました。これらの人々は決して豊かな生活状態ではありませんでした。それだけに現状にあまんずることもなく、このころと製紙技術を身につけた人は、当時大変に貴重で、全国の製紙会社から盛んに引き抜かれ、各地を転々として歩いた人も数多くありました。

水とのたたかい

沼川六つめがねと昭和放水路の構築

為政者や直接生産者の経験した、きびしい国際的経験が基調となつて、この地方の産業構造は急速に変革していききました。つまり、いままでも未開発であった畑作地帯や原野は茶に、工業の近代化路線は製紙を中核としてあるときは停滞し、あるときは拡充、発展といった、ジグザグなコースをたどりながら、今日にいたったのが富士市の明治百年です。
また、富士市の百年の間もなく、各地に技術者として招かれていたのちその技術を資本として製紙会社、六信舎を創立しました。この六信舎の近くに堀野蘭太郎がおり、常に六信舎を訪れて技術を覚えやがて堀関製紙を創立して、六信舎と生産競争をするようになりま



金子彦太郎



斎藤知一郎

の敷設が問題になった。後から、川口柳作や堀野蘭太郎らのきつづいた吉原の製紙工場の基盤は確立していった。今泉から吉原までのわき水地帯に大小の工場が創立され、紙都吉原への道がようやく開かれたころでした。このころはちょうど明治百年の半ばでした。
このように吉原の製紙工業の路線は、なお幾多の曲折を経験しつつ、斎藤知一郎に代表される大昭和製紙のような、土地の資本をもととした、富士王子-本州系とは異なった型の中で雑草の如く力強く発展していったので
以上のように、富士市の明治百年を限られた事実を手がかりにみると、それはこの地方に住んだ人がつねに地域の新しい可能性を探究し、可能性の実現に粘り強く、真剣に取り組んだ、苦難に満ちた歴史であったことを示しています。
今日のこの地域の繁栄の背後にある、地域の発展に取り組んだ先人の存在を忘れては、明治百年の意義は、むなしのお祭り騒ぎにしきすさないのではありませんか。
静かにこの百年をふりかえり、新しい地域の可能性と、国家の将来を探究する年であることを、先人たちは無言のうちに教えてくれているように思います。